

現地レポート

秋田県八峰町

専用肥料の溝施肥で 理想の長ネギ栽培を実現

長ネギは栽培期間が半年以上と長く、栽培中の土寄せ作業など、非常に手間のかかる作物です。

今回ご出演いただいた福士保洋さんは、秋冬採り長ネギの他に水稲、初夏から秋にかけて収穫するキャベツ、枝豆も栽培されています。

現在使われている専用肥料の開発にまつわるお話や、理想とする長ネギについてお聞きしました。



サンアグロ
SUN AGRO CO., LTD



■理想の長ネギ

栽培している作物の葉色は、濃い方が好まれますし、安心します。

「しかし、福士さんは違いました。収穫直前の葉色が、以前使っていた肥料よりも淡く若々しい、そういった姿だったんです。さらに収穫を始めて、ネギに触って直ぐに肌艶がとてもしつこいことに気が付きました。肉質もきめ細かくてしつかりしている。しかも適度に厚みがあってコシもあり、折れにくい。収穫作業がとても楽でした。」

「収穫後、調整作業をするまでの間、束にして立てておきます。長期間立てておくと普通は曲がってしまいうのに、曲がらなかったんです。」
「それからもう一つ。ネギの葉の中には『ヌル』という液体が溜りまします。これが調整作業の邪魔になり、しかも、この液体がネギに着いた状態で出荷すると、市場から『異物が付着している』とクレームが付くんです。硫黄コートで栽培したネギには、この液体がほとんど溜っていません。これには本当に驚きました。仲間の農家に話しても信じてもらえないんです。」
「予想外の現象に、福士さんも戸惑ったそうです。」

■元肥一発型肥料を導入 専用肥料開発までの道のり

「長ネギ栽培を始めた頃は、元肥と4〜5回の追肥をやっていました。省力化が一番の目的でしたが、天候の影響などで適期に追肥が出来ないこともあり、元肥一発型肥料を導入しました。」

福士さんは就農21年のベテラン農家。長ネギ栽培は15年ほど前から始めたそうです。
「3年ほど樹脂コートが配合された肥料を使っていました。ネギの生育が停滞する夏場に効き過ぎるようで、なかなか理想とするネギができませんでした。全体的に軟弱で、べと病が多発したそうです。」



施肥風景。苗を植える溝の底に施肥する『溝施肥』。

■元肥全量を溝施肥

「専用肥料を10アール当たり1000キロ。これを全量溝施肥します。」

「溝施肥」は、苗を植える溝の底に施肥する方法です。肥料の上に苗を移植していくため、肥料焼けが心配されず。溝施肥をした後に苗を定植しますが、この時に施肥した肥料が分散されるため、肥料が根に直接触れることはありません。また、肥料が株元に集中することもないので、肥料焼けの症状は一度も出ていません。」



収穫風景。専用の収穫機械での作業。折れない、割れない。

「3年前に出羽青岩アグロ株の大谷さんから、硫黄コートを使った肥料を紹介され、試験的に使ってみました。しかし、1年目は思っていたような生育にならず、改善するようお願いしました。」

この年は生育途中で、肥効が不足したそうです。
「配合内容を改良した結果、2年目は栽培期間を通して肥効が安定しました。特に、夏場の生育状況は私が理想としている姿そのもので、とても驚きました。3年目からは全面採用させていただきますました。」

『日産マイルドスペシャルブレンドネギ専用25-7-6』の誕生です。



定植風景。施肥された肥料は分散され肥焼けしない。

■農業は『生きざま』

福士さんは地域のリーダー的な存在で、地元の農協では部長も務めておられます。とても勉強熱心で、観察力の鋭さにも驚かされます。

そんな福士さんに聞いてみました。
「生きざまにとって農業とは何ですか？
「生きざまみたいなものです。職業と言うより生業。生きていくために必要な仕事だと思っているので、生きざまそのものが出るんじゃないかと思っています。」
「迫力ある言葉に、思わず息を呑みました。」

『生きざま』という言葉は、福士さんそのものです。
「ありがとうございます。」



調整前保管中のネギ。曲がらない。